

ソルデル、ベルトラン・ダラマノン、
ペイレ・ブレモン・リカス・ノヴァスによる
ブラカッツ殿に捧げる哀悼歌(*plank*)三篇
(翻訳)

高 名 康 文

はじめに

以下に訳出するのは、1236年頃に亡くなったブラカツという人物⁽¹⁾の死を嘆いてトルバドゥール三人がそれぞれに書いた哀悼歌である。訳者にとっては、先に発表した「トルバドゥールによる12世紀の哀悼歌 (*planb*) の翻訳」と「アイメリック・デ・ペギヤンの哀悼歌」に続く哀悼歌の翻訳である⁽²⁾。

今回訳出する三篇について注目すべきは、その成立事情である。それぞれの詩人が別々に死者を嘆いたということではなくて、ソルデルが持ち出した死者の心臓を食べるという奇妙なモチーフをベルトラン・ダラマノンが批判し、さらにペイレ・ブレモン・リカス・ノヴァスが二人を批判するというように展開されている。すなわち、哀悼歌としての側面に加えて論争詩（シルヴェンテス）としての側面をも併せ持っている。三篇とも詩型は同一であり、同じメロディーに乗せて歌われたものと考えられる⁽³⁾。

翻訳にあたっては、逐語訳で意味が通るようにする、ということを第一に目指した。訳文中の […] は原文にはない語句を補っている箇所であることを示し、 [=…] は直前の語句を言い換えにより説明している箇所であることを示すものとする。

ソルデル (Sordel)

Planher vuelh en Blacatz en aquest leugier so (PC437.24)⁽⁴⁾

底本：ed. M. Boni, *Sordello, le poesie*, Bologna : Palmaverde, 1954,

pp. 158–165.

死者：ブラカッツ (Blacatz) (1136 年没)

詩型：a12 a12 a12 a12 a12 a12 a12 a12 (Frank 5:5)

I

この簡単なメロディーでブラカッツ殿を悼みたいと思います。
悲しく、沈んだ心をもって。そうする理由があるのです。
あの方において、私は主君と良い友を失ったのですから。
勲高い風習が全て、あの方の死において失われたのですから。
損害は致命的で、私には希望がありません、
回復するだろう、などという希望は。次のようにしない限り。
あの方から心臓を取り出して、領主たちが食べるのです。
意気地なしの [=心臓がない] 領主たちが。心臓から利益を得ることでしょうから。

II

最初に食べるのは、そうする必要がおおりだからですが、
ローマの皇帝⁽⁵⁾です。もし彼がミラノ人たちを
力づくで征服することを望むのであれば。というのも、彼らは皇帝のことを
征服された者、
生きながらに相続を失った者と考えているから。彼の [味方の] ドイツ人た
ちにはお気の毒さま。
皇帝に続いては、フランス王⁽⁶⁾がこれを食べますように。

そうすれば、愚かさのゆえに失ったカスティーリアを取り戻すことでしょう。でも、母親の気に入らなければ、少しも食べないことでしょう。彼の名誉にかけて、彼女の気に入らないことはしないようですから。

III

イングランド王⁽⁷⁾のことが私には嬉しいです。あまり勇気がないからです。たっぷりと心臓を食べますように。そうすれば、勲高く、立派になり、領土を回復することでしょう。領土のせいで、彼は名誉を失って生きているのです。

領土は、フランス王が奪ったのです。彼のことを駄目な奴だと思っているので。カスティーリア王⁽⁸⁾は二人分食るといいです。彼は王国を二つ持っているのですが、その一つについてはうまくいっていませんから。

でも、食べたいと思うなら、隠れて食べることです。母上がそのことを知れば、棒で彼のことを叩くでしょうから。

IV

アラゴン王⁽⁹⁾が心臓を食べることを望みます。そうすれば、屈辱をそそぐことになるでしょうから、ここマルセイユとミヨー⁽¹⁰⁾で経験した屈辱を。名誉ある振る舞いをしたことには、

さもなくば、ならないのですから。何を言おうとなそうと。それから望みます。心臓がナバラ王⁽¹¹⁾に与えられることを。王としてよりも伯であった時の方が値打ちがあったと聞いています⁽¹²⁾。

神のおかげで大いに豊かになったというのに、
その後で、度胸 [=心臓] が欠けているために値打ちを下げるとするのは間違ったことです。

V

トゥールーズ伯⁽¹³⁾も、よく食べる必要があります。
かつて持っていたものと今持っているもののことを思い出すのならば。
というのも、他人の心臓を持ってきても損失の埋め合わせにならないのなら、
彼の中にあるもの [=心臓] ででは埋め合わせられないと私には思えるからです。

プロヴァンス伯⁽¹⁴⁾も食べるべきです。思い出すのなら、
相続を失って生きる者には、ほとんど全く価値がないことを。
頑張って、わが身を守り、持ちこたえているにしても、
耐えている重荷を考えれば、食べる必要があるのです。

VI

領主殿たちは、私が適切に言ったことで、私を恨みに思うことでしょう。
でも、知っておいてもらいたいものです。彼らが私を評価しない位、私が彼ら
を評価していないことを。

VII

美しいレスタウル⁽¹⁵⁾よ、あなたのもとで慈悲に与れるのですから、
私を友と思ってくれない人は皆軽蔑してやるのです。

ベルトラン・ダラマノン (Bertran d' Alamanon)

Mout m'es greu d'En Sordel, car l'es faillitz sos senz (PC76.12)

底本：ed. J. -J. Salvarda de Grave, *Le troubadour Bertran d'Alamanon*,
Toulouse : Privat, 1902, pp.95-112.

死者：ブラカッツ (Blacatz) (1136 年没)

詩型：a12 a12 a12 a12 a12 a12 a12 a12 (Frank 5:1)

I

ソルデル殿のことで心を痛めています。彼が分別をなくしているのです。
彼のことを賢くて知識のある人だと思っていました。
でも、それは思い違いでした。それが悲しいのです。
彼は、とても卑しい人たちに名誉ある待遇をしたのです、
ブラカッツ殿の心臓によって。この上なく値打ちがあるものなのに。
これを無駄にしようとしているのですが、生憎それは間違っています。
これを無駄にするのですから、同様に五百の心臓を無駄にすることでしょう。
でも、これが臆病者のお腹の中で失われるというようなことには決してなり
ません。

II

高貴なご婦人方が分け合って、
聖遺物として持ち、名誉とするでしょうから。
プロヴァンスの夫人⁽¹⁶⁾が、彼女には美徳の精髓があるから、
最初に口にして、至高の愛のためにとっておかれましように。

次にはベアルヌの夫人⁽¹⁷⁾も、彼女には真実の美德があるから、
あの方の死によって持つであろう悲しみが
喜びと甘美さに変わるだけ食べますように。
彼女は、いつもあの方の美德と称賛を高めてきましたから。

III

秀でた伯夫人であられるウイーンの奥方⁽¹⁸⁾が
心臓を口にされることを望みます。美德を積んでこられたから。
心臓には靈験があるから、大事にとっておられますように。
これを持っていれば、いつでも何事においてもうまくいくでしょう。
また、ラ・ツァンプラの麗人⁽¹⁹⁾、[ブラカッツ殿の]心臓は彼女の内によく
落ち着くことでしょう。
彼女も口にすることを望みます。他の全ての美德を持っているのですから。
雅やかな自分自身を守るのと同様に、それを守りますように。
それ以上にうまく守ることはできないというものです、学のある方々の意見
によれば。

IV

ギーダ・デ・ロデーズ⁽²⁰⁾が心臓を口にしますように。なぜなら
自分の美德を有徳の士たちに受け入れさせてきたし、あらゆる美德が彼女を
喜ばせるから。
大事にとっておられますように。そうするべきだから。
彼女は今も十分に値打ちがありますが、更に値打ちが上がるだろうから。
ラムバウダ・デル・パウス様⁽²¹⁾が心臓を味見してみますように。

彼女は美しく、善良で、本当の美德を持っていますから。

大事に守りますように。というのも、[心臓が] 彼女にとって素敵な全てのものを

守ってくれるからです。名誉と、その喜ばしく明るい人柄を損なうことなく。

V

リュネルの君⁽²²⁾が、彼女は本当に完璧な美德をお持ちなので、心臓を口にされることを望みます。そうすれば、自分は二人分だと思わせよう。

彼女は美しく善良なうえ、[ブラカッツ殿の]心 [=心臓] は喜ばしくて感じが良いのですから。

大事に守りますように。立派な方々に感謝されることでしょう。

次に、ピノスの美女⁽²³⁾が心臓を口にしますように。

彼女は美しく善良で、喜ばしい佇まいをしています。

そして、それを守りますように。彼女の恋する心 [=心臓] は常に愉快で陽気な心 [=心臓] の靈験に与るでしょうから。

VI

栄光に輝く神がブラカッツ殿のことを考えて下さいますように。

あの方の心臓は、あの方が愛しておられた女性たちの内にあるのですから。

VII

美しくて魅力のあるエスメンダ⁽²⁴⁾よ、神があなたを私のため守って下さっているのですから、

誰が喜ぼうと、誰が悲しもうと、私はいつも陽気に生きることでしょう。

ペイレ・ブレモン・リカス・ノヴァス (Peire Bremon Ricas Novas)

Pus partit an lo cor En Sordel e'N Bertrans (PC330.14)

底本：ed. J. Boutière, *Les pœsies du troubadour Peire Bremon Ricas Novas*, Toulouse : Privat, 1930, pp.77-80.

死者：ブラカッツ (Blacatz) (1136年没)

詩型：a12 a12 a12 a12 a12 a12 a12 a12 (Frank 5:3)

I

ソルデル殿とベルトラン殿は心臓を分けてしまいました、
真正の主君であるブラカッツ殿の心臓を。これ以上嘆くのはやめにして、
私はご遺体を多くの大国に分けることにしましょう。
彼方では、四分の一を持つことでしょう、ロンバルディアとドイツと
ブリュッシャとロシアとフリースラントとブラバントが。
皆でローマに来て、聖遺物を礼拝しますように。
勲高い皇帝⁽²⁵⁾は、そこに礼拝堂を作りますように。
そこで、あの方の勲と喜びと気晴らしと歌がまつられますように。

II

もう四分の一は、フランス人がブルゴーニュ人と共に、
サヴォワ人とヴィエンヌ人と、オーヴェルニュ人とブルトン人と
勲高いポワチエ人が持ちますように。彼らは散財が好きですから。

また、臆病者のイングランド人たち⁽²⁶⁾でも、それに告解をすれば、その後、善人になったと思われない程に悪い人はいないというものでしょう。聖遺物が信仰の場に置かれているのですから。パリを所領とする王⁽²⁷⁾は、それをごろつきどもから守りますように、分別と寛大さによって。そうするのが良いのですから。

III

三つ目の四分の一は、勲高いカスティーリア人が持ちますように。それを拜みに来ますように、ガスコーニュ人とカタロニア人とアラゴン人は。彼らは称賛に値する完璧な徳を持っていますから。もしも、ナバラ王⁽²⁸⁾がやって来るとしたら、よく知っておくとよい、気前が良くて優れていなければ、遺体をまったく見ることができないと。カスティーリアの善き王⁽²⁹⁾がそれを手に握っているでしょうから。人に与え、散財しながら聖遺物を守ることでしょう。王の祖先も優れて完璧な徳によって世を治めました。

IV

四つ目の四分の一は、私たちプロヴァンス人が持ちましょう。全部与えてしまったら、あんまりというものでしょうから。サン・ジル⁽³⁰⁾にそれを安置することにしましょう。共同の[祈りの]場所として。ルエルグ人と、トゥールーズ[人]も、ベジエの人々も来るように。もし秀でた徳を持ちたいならば。今後、伯たち⁽³¹⁾は真摯な愛情によって和平を結ぶでしょう。

私の望みなのですが、各人が自分の救済に気を配ることでしょう。
喧伝される大きな宮廷も、気前の良さがなければ何の価値もありませんから。

V

聖遺物の頭部を本当に送らしましょう、
彼方に、神がお生まれになったエルサレムに。
彼方に、カイロのスルタン⁽³²⁾に、彼が洗礼を受けさえすれば、
私は頭部を差し上げましょう。[洗礼を] 拒絶することがなければですが。
ギー・デ・ギベリエ⁽³³⁾が、彼には称賛に値する完璧な徳があるから、
聖遺物を異教徒のために守りますように。
アッコ王⁽³⁴⁾がそこに来るなら、金銭欲は捨てて、
気前よく、勲高くあれ。贈られたものをよく守りますように。

VI

神が遠慮なさらずブラカッツ殿の魂をお召しになったのだから、
この世で、多くの勲高い騎士が、あの方の代わりに [神に] 奉仕しますように。

(本研究は科研費 (23520412) の助成を受けたものである。)

This work was supported by JSPS KAKENHI (23520412)

註

- (1) オプス (現在のヴァール県に位置する) の領主で、多くのトルバドゥールを庇護した。彼らにとっての宮廷人の美徳の一つである「若さ (*Jovens*)」を体現した人物であるとして多くの詩の中で称賛された。自身も詩作をし、11

篇の作品が残されており、うち2編はM. デ・リケールの選集に入っている(M. de Riquer, *Los trovadores. Historia literaria y textos*, Barcelone : Planeta, 1975, t. 3, pp. 1257–1260)。生没年は、1144 頃–1236 頃。ここに訳した作品の成立年代推測の鍵となる没年には様々な説があり、論争的になっているが(ed. M. Boni, *Sordello, le poesie*, Bologna : Palmaverde, 1954, pp. LXIX–LXXI を参照)、ここではM. デ・リケールの記述に従う(M. de Riquer, *op. cit.* p. 1257, 及び p. 1464)。

- (2) 高名康文「トルバドゥールによる12世紀の哀悼歌(planh)の翻訳」『福岡大学研究部論集 A:人文科学編』9-3 (2009), pp. 11–21 と「アイメリック・デ・ベギヤンの哀悼歌」『福岡大学人文論叢』42-3 (2010), pp. 843–857。共に福岡大学のウェブサイトからpdfファイルでも公開されている。後者に簡略な哀悼歌についての解説を載せている。
- (3) 瀬戸直彦「中世フランス抒情詩の詩法について—イシュトヴァン・フランクによる詩型の研究」『比較文学年誌』(早稲田大学比較文学研究室)、t. 37 (2001), pp. 1–29 の p. 19 を参照。
- (4) 詩の歌いだしの原文をピレットとカルシュテンスの書誌(A. Pillet und H. Carstens, *Bibliographie der Troubadours*, Halle : Max Niemeyer, 1933)における分類番号を付して記している。また、「詩形」の項目には、各連の韻律と、I. フランクによる詩型の分類番号(I. Frank, *Répertoire métrique de la poésie des troubadours*, 2 vols., Paris: Champion, 1953–1957)を示している。
- (5) 神聖ローマ帝国皇帝フリードリヒ二世(1194–1250)を指す。ミラノを中心とするロンバルディアの自由都市は、1226年に皇帝に対抗して同盟(ロンバルディア同盟)を結び、皇帝の死(1250年)まで彼に対する反発心を持ち続けた。(ed. J. -J. Salvarda de Grave, *Le troubadour Bertran d'Alamanon*, Toulouse : Privat, 1902, pp. 107, 108 を参照。)
- (6) フランス王ルイ九世(1214–1270)は、1226年に父王ルイ八世の王位についたが、幼かったため、母ブランシュ・ド・カスティーユ(1188–1252)が摂政となった。母親の政治介入は、1229年に親政を始めた後も続いた。彼女は、カスティーリア王アルフォンソ八世の長女だが、父及び弟エンリケー一世の死後、カスティーリア王位は妹ベレンゲラ、続いて、彼女とその夫アルフォンソ九世レオン王との間に生まれたフェルナンド三世に継がれていくことにな

る。

- (7) イングランド王ヘンリー三世 (1207-1272) のことを指す。その父ジョン失地王は、ノルマンディーからポワトゥーにかけてのフランス国内の領土を失っていた。
- (8) カスティーリア王フェルディナンド三世 (1199 頃 -1252) のこと。1230 年には父アルフォンソ九世よりレオン王国も相続した。
- (9) アラゴン王ハイメー一世 (1208-1276) のことを指す。
- (10) マルセイユはプロヴァンス伯レーモン・ベランジェ四世の領地だったが、1230 年の都市民の反乱により、都市民が頼ったトゥールーズ伯レーモン七世の手に落ちた。プロヴァンス伯には男児がいなかったため、そのまま逝去した場合、その地位は従弟のハイメー一世に譲られるはずだった。ミヨー (かつてのルエルグ、現在のアヴェロン県に位置する) は、1229 年のパリ条約により、ハイメー一世から奪われて、フランス王ルイ九世からトゥールーズ伯に譲られた。1237 年 7 月にはハイメー一世が取り戻したという歴史書の記述があるが、この年代はあまり正確なものではないと評価されている。(ed. M. Boni, *op. cit.*, pp.164, 165 の解説, ed. J. -J. Salverda de Grave, *op. cit.*, pp. 103-104 の解説を参照。)
- (11) トルバドールとしても知られるシャンパーニュ伯ティボー四世 (1201-1253) は、1234 年にナバラ王となった (テオバルド一世)。
- (12) 1236 年にティボーが首謀して、数年前に失ったプロワ、シャルトル、サンセール、シャトーダンをフランス王から奪回しようと企てたが、失敗してルイ九世の弟アルトワ伯ロベール一世から侮辱を受けたという。(ed. M. Boni, *op. cit.*, p. 165 の解説を参照。)
- (13) トゥールーズ伯レーモン七世 (1197-1249) は、1229 年にルイ九世との間に結んだパリ条約で領地の多くを失った。
- (14) プロヴァンス伯レーモン・ベランジェ四世 (1195-1245) と、トゥールーズ伯レーモン七世の間にマルセイユを巡る争いがあったことについては注 10 に触れた。作者のソルデルはこの作品を書いた時期、恐らくプロヴァンス伯のところにいる。他の「相続を奪われた」人物への批判が皮肉を含んだ呵責のないものであるのに対して、この伯に対してだけは叱咤激励のニュアンスを含んでいるのはこのことによると説明できる。(ed. M. Boni, *op. cit.*, p. 165 の解説と M. Aurell, *La vielle et l'épée*, Aubier, 1989, p. 141 を参照。)

- (15) M. ボーニは、この詩が書かれる前にソレルがロデーズ伯のところに滞在したと推測し、レストウル (Restaur) というセニャル (作品末尾の詩節であるトルナーダで行われる詩を献呈する相手への仮名の呼びかけ) は、ロデーズ伯アンリー世の娘ギーダ・デ・ロデーズ (Guida de Rodez) のことであるという。ギーダは 1235 年にモンロール (Montlaur) 領主ポンスに嫁いだ (ed. M. Boni, *op. cit.*, pp. LIX–LXI と p. 165 及び A. Jeanroy, *La poésie lyrique des troubadours*, 2 vols., t. 1, pp. 182–184 を参照)。「セニャル」については、瀬戸直彦「セニャルあるいは窓から降る手—トルバドゥール詩における「仮名」について—」『早稲田大学大学院文学研究科紀要』、50 (2004), pp. 5–33 の pp. 5–9 に詳しい記述がある。
- (16) プロヴァンス伯レーモン・ペランジェ四世の妃ベアトリスを指す。以下、この詩で心臓が捧げられる対象となっているのは、彼女を中心とする文芸サークルに属して詩人たちを庇護した婦人たちである。人物についての注は、断りがない限り、A. Jeanroy, *op. cit.*, pp. 181–184 による。
- (17) プロヴァンス伯アルフォンソ二世 (レーモン・ペランジェ四世の父親) の娘で、ベアルス副伯ギヨーム・ド・モンカードに嫁いだ。上注のベアトリスとは義理の姉妹の関係である。
- (18) モンフェラ辺境伯ギヨーム六世の娘ベアトリスのこと。1220 年にウイーン伯太子 (1228 年に即位) ギー・アンドレに嫁いだ。
- (19) 前注のベアトリスの侍女で、彼女と共にプロヴァンス伯の宮廷にやってきたという。歴史的な資料は残っていない。
- (20) 注 15 を参照のこと。
- (21) この人物に関して歴史的な資料は残っていない。ソルデルとベルトラン・ダラマノンのパルティメン (論争詩) の審判者に選ばれたランムパウダのことで推測されている (ed. M. Boni, *op. cit.*, XVI, v. 46 (p. 110))。
- (22) ギエム・デ・モンタニャゴルとブラカセットの詩に出てくるガウセラン・デ・デ・リュネルのことであるという (ed. P.–T. Ricketts, *Les poésies de Guillem de Montanbagol*, II, v. 11 (p. 49) ; appendice I (p. 139))。
- (23) 逸名の旅芸人二名によるテンソン (論争詩) で審判者に選ばれている女性であるという。
- (24) オック語の «esmenda» には「罰金、報酬、身代金」の意味がある。本訳の底本の校訂者サルヴェルダ・デ・グラウヴェは、これをセニャルであると解

釈し、「ses menda」(「欠点のない」)という表現にかけているのではないかと推測している。(ed. J. -J. Salverda de Grave, *op. cit.*, p.110 の注釈を参照。)

- (25) 神聖ローマ帝国皇帝フリードリヒ二世を指す。
- (26) ヘンリー三世のイングランドは、ルイ九世のフランスと交戦していたが、1235年に5年間の休戦協定を結んでいる。
- (27) フランス王ルイ九世を指す。1229年にプロヴァンス伯レーモン・ベランジェ4世の長女マルグリットと結婚をしている。
- (28) 注11、12を参照のこと。
- (29) カステリア王フェルディナンド三世(注8を参照のこと)は、モーロ人との戦いにおいて戦果を得たことを称えられる王でもあった(ed. Boutière, *op. cit.*, p. 123の注釈を参照)。
- (30) 現在のガール県に位置するサン・ジルの修道院は7世紀末にこれを創設したアテネ出身の聖アエギディウスの聖遺物を取っており、多くの巡礼者が訪れていた(*idem.*)。
- (31) プロヴァンス伯レーモン・ベランジェ四世とトゥールーズ伯レーモン七世を指す。注10を参照のこと。
- (32) 1229年に神聖ローマ帝国皇帝フリードリヒ二世と和平を結んだマレク・エル・カメル(在位1218-1238)のことであると推測されている。実際に、この時期に法皇グレゴリー九世は宣教師を派遣してイスラムの王族を改宗させようという試みがあったが、失敗したという。*(ibid. p.124を参照。)*
- (33) 十字軍の時代、バイルートの北方30kmに位置する都市ビブロス(Giblet)と呼ばれた。ギベリエ(Guibelhet)はそのオック語読み。この地の領主であったギーは、1228年にフリードリヒ二世がシリアに進軍した際に金銭を貸した上、軍に加わったという。*(idem.)*
- (34) アッコ王とはフリードリヒ二世であるという説と、その義理の父親であるジャン・ド・ブリエンヌであるという説がある(*ibid.*, pp.124, 125)。